

どんな名前に？

弟が中学生の頃だったか、にやにやしながら「お兄ちゃん、森鷗外のホンマの名前知ってるか」と言ってきたことがあった。「シンリン・タロウ、言うのやで」。

——墓碑銘の話が有名なので、「森林太郎ノ墓」の写真でも見たものらしいが、読み方も切り方もおかしい。「シンリン」に「タロウ」とくれば、なんだかコメディアンである。漱石（本名：金之助^{きんのすけ}）、鷗外（本名：林太郎^{もりりん たろう}）、泉鏡花（本名：鏡太郎^{きょうたろう}）、というように、明治の文豪は名前を雅号にする例が多い。田山花袋（本名：録弥^{ろくや}）も、島崎藤村（本名：春樹^{はるき}）も雅号。一方、志賀直哉、武者小路実篤、芥川龍之介、宮沢賢治、川端康成など、活躍時代が、昭和以降になると本名のままという作家も多くなる。太宰治（本名：津島修治^{つしましゅうじ}）や三島由紀夫（本名：平岡公威^{ひらおかみけい}）のようにふつうの名前のようなペンネームもある。

る。

俳人の場合には本名のもじりがおもしろい。高浜虚子は本名「清^{きよし}」。対する河東碧梧桐の本名は「秉五郎^{へいごろう}」。「へいごろう」が「へきごとう」になっている。山口誓子は「新比古^{ちかひこ}」をもじって別の漢字にしている。それぞれ、音だけでなく漢字の選び方もおもしろい。

最近の子どもたちの名前の子もある意味で凝ってきている。命名での漢字の使い方が少し変わってきているのだ。例えば「優」を「ゆ」とだけ読ませたり、「翔」を「と」、「桜」を「さ」と読ませたりする用字法が見られる。本来、「優」の音読みは「ゆう」だが、その一部だけが使われていることになる。また、「翔」の訓は「とぶ」という「語」が対応するのだが、その訓読みの一部を切り離して「と」という音としてだけ使うのである。「桜」の「さ

くら」を「さ」という音として使うというのも訓読みの一部の音の借用。この流儀でいくと「樽曇浪浮」で「たくらう」と読ませることもできてしまう（「多苦劣」よりマシ？）。もっとも、「安」が「あ」、「止」が「と」というように、仮名の起源をたどってもわかるとおり、音読みや訓読みの読み方の一部の音に対応させてその漢字を書くという使い方は古くからあった。みんなが人名での「優」「翔」「桜」という字をそれぞれ「ゆ」「と」「さ」のように読むようになってくれば、それは新しい慣用の成立ということにもなる。

用字だけではない。人名の漢字は常用漢字と法務省認定の人名用漢字だけだが、そこにも「穹、禰、巫」等の追加がある。ただ、名前を読むときには用心が必要。森林・太郎なんて勘違いさえあるのだから。

早稲田大学教授

森山卓郎^{もりやま たくろう}